

Elizabeth Gaskell の短編小説における母親たち

越 川 菜穂子

Mothers in Some Short Stories of Elizabeth Gaskell

Naoko KOSHIKAWA

The purpose of this paper is to observe Elizabeth Gaskell's images of her ideal mother focusing on four of her short stories.

In *Bessy's Trouble at Home*, Gaskell described the figure of mothers in families dominated by paternity, which is common in the Victorian era. She created *Hand and Heart*, with her own views of education in families. In *Lizzie Leigh*, she wrote each form of motherhood of three women: Lizzie, Mrs. Leigh, and Susan. She opposed the conviction of the Victorian era—fallen women cannot do otherwise than die—by restoring the heroine Lizzie, a 'fallen woman'. Although she loses her baby, she manages to come back to the society after the struggling days. Through *The Moorland Cottage*, Gaskell made an assertion that one cannot learn the ethics without exchanging true love deeply rooted to motherhood with his or her family.

Key words: Elizabeth Gaskell, motherhood, Christianity

エリザベス・ギヤスケル、母性、キリスト教信仰

(1)

Coral Lansbury は *Cranford* の theme を要約して、'the single life for men and women can be as blessed as marriage.' と述べ、これは当時としては 'radical sentiments.'¹⁾であったと批評している。けれども、作者が独身生活をする自由を唱えているのだとしても、*Cranford* の女性たちの暮らしにはやはり寂寞を感じざるを得ない。*Cranford* が刊行された1851年には20歳から40歳までの英国の女性の42%が未婚であったという人口調査²⁾を信頼すれば、多くの女性たちは独り暮らしを選ぶ余裕があったのではなくて、むしろそれを余儀なくされたのだと推測するのが妥当だろう。

Cranford については、Gaskell は「女だけの町」における 'full horror' を書いているのであり、女たちは男がいなくても結構やっていけるというふりはしてい

るが、それは虚勢にすぎず、じっさいには彼女たちが 'neurotic, hysterical, helpless and repressed' であるという見解 (Martin Dodsworth) や、同じように negative な批評として、この小説の女たちは 'self-deceiving frustrated spinsters' であるという意見 (Patricia Beer) や、さらには Miss Matty を 'a victim of the nineteenth century's infantilization of women' とみる見方 (Patsy Stoneman) もある³⁾。いずれも頷ける批評である。この小説には独り身の女性の pathos が色濃くただよっており、終わり近くでは結婚する女性への羨望が語られている。だから、この小説を読んで作者の結婚観の一端は知ることができる。けれども、作者の家族観を知ろうとしてこの作品を読むのは虚しい作業である。*Cranford* を書き始めたころ、Gaskell 自身は41歳で結婚生活19年目、子どもが4人いて幸せな生活を送っていたが、そのような作者の生活は、作品にはほとんど

受付 平成15年10月8日, 受理 平成15年11月4日

近畿福祉大学 〒679 2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966 5

反映していない。これは、彼女が Knutsford を懐かしみながら書いたからでもあろう。いったいに作家は、作品では不運な人生を書くものである。それは、幸福な家族環境を設定したのでは作品に託した思想あるいは主題が展開しにくいことや、波瀾のある物語を求めている読者に応えることができないなどの事情があったことであろう。

Gaskell は中・短篇小説でも、たいてい波瀾のある物語を書いているが、母と子どもたちの家族関係を theme にした作品のなかでは、*The Sunday School Magazine* に掲載した *Bessy's Troubles at Home* (1852) が、比較的気楽に読める。母の留守中の家庭の様子を扱っていて、事件と言っても少女が火傷を負うという程度で、めずらしく不運な生活を描いていないからである。

Cranford ではほとんどの人物が独り住まいであったが、この作品は兄弟姉妹が 6 人いる母子家庭の話である。*Cranford* の Jenkins 家では厳格な父が家族を支配していて、母は親としての存在を認められていないが、この作品で語られるのは母子家庭であり、それ故にこの家庭は父権に支配されなくてすんでいる。こうした父親不在の設定は、家庭における母の役割の大きさを例証するためにはよい方法であるかもしれない。これと同じように未亡人の母が独り息子への家庭教育でみごとな成果をあげる話を、Gaskell は後で考察する *Hand and Heart* でも取り上げている。もっとも、母と子どもたちの関係を theme にした中・短篇小説としてここで考察する諸作品は、すべて母が未亡人である。これは偶然ではなく、そもそもこの作家は夫婦そろって子どもがいる家族をあまり描かない。

さて、*Bessy's Troubles at Home* の主人公は title から判断すれば長女の Bessy ということになるが、事実上の heroine はむしろ彼女の妹で要領が悪く失敗ばかりしているようにみえる苦労性の Mary である。Betty は入院中の母の代理役に失敗し、妹の Mary がその役をやり遂げる。

Bessy を title にしたのは、母の代理役を買ってでたこの十五歳の少女が失敗を重ねることを通して主婦の仕事の難しさを例証していくことを作者が意図しているからである。妹の Mary は黙々として母の役割をこなし、火傷を負ったりする。Bessy は医者から '—never neglect the work clearly laid out for you by either God or man, to go making work for yourself, according to your own fancies. ⁴⁾と諭されて深く反省する。

Mary は、Gaskell の作品にしばしば登場する犠牲者タイプである。学校の成績がそうよくないから自分を

愚者のように思い込んでいるが、それは家族の誰にも役に立とうとして、自分の勉強の時間を犠牲にしてしまふからだ。少女ではあるが、母性が備わっている。Gaskell は母性をしばしば theme にしているが、その特徴は一途さである。一途さはひたむきであるゆえに、しばしば賢明さから遠ざかり、愚かしさに近づいていく。

なお、Gaskell が愚かしさとみえる沈黙を賛美するのは信仰上の理由による。Gaskell の作品では、誠実な人物は常に reticent であり、表現力の豊かな人物は信頼性に欠ける。*The Half-Brothers* の Gregory は沈黙を守って行動するが、それと対照的に *Cousin Phillis* の Holdsworth は能弁である。

Mary の性格について、作者は次のように書いている。

—Mary was not a quick child; she was plain and awkward in her ways, and did not seem to have many words in which to tell her feelings, but she was very tender and loving, and submitted meekly and humbly to the little slight and rebuffs she often met with for her stupidity. (519)

Gaskell はここで主婦の仕事がこなせる女の資質を提示しているのであるが、これは彼女が他の作品に登場させる涙ぐましい母親たちに共通する。たとえば後で考察する *Lizzie Leigh* の母などは、Mary が結婚してからの像だと言えそうだ。

(2)

作者自身はこの作品を失敗作だと思っていたようだが、それはおそらく読者が Bessy の魅力に惹かれるあまり、日曜学校の子どもたちに読ませるために書かれた作品から読者がよくない影響を受けることをおそれたからだろう。他方、日曜学校の生徒たちには、'a clever, spirited girl' (526) が思慮が足りない子で、'stupid' な子がじつは賢明であったという訓えは、多分退屈であったろう。

Bessy は Mary と対照的な性格である。要領がよく行動的であり、陽気ではあるが、感情に起伏がある。要するに、善人ではあるが人並みの欠点をもつ少女である。六人の兄弟姉妹は、'They were all good children, and all had fault' (516) である。つまり作者は、Bessy も欠点はあるがよい子として描いている。このような寛容な性格描写により、Bessy には humorous な魅力がそなわって、欠点のゆえに愛すべき少女になっている。Gaskell は Bessy が欠点を改め、成長したことを読者に印象づけようと意図したのに、書き終えてからそれが果たせていないことに気づき、失敗作だと判断

したのかもしれない。けれども私には、この作品を執筆していた時の Gaskell は、Mary よりも Bessy の方に自分を投影することができて、思いがけない楽しさを感じたのではないかとさえ思える。それほどに、Bessy は魅力的な娘である。逆に、少年とは思えない説諭をする Jem は作品を説教臭くしてしまい、Bessy によって醸し出された楽しさに水を差している。

描かれているのは母子家庭ではあるが、Gaskell は Mary によって、父権が支配する家庭での主婦の資質を提示しているという印象が強い。ここに、私たちは時代の違いを感じないではおれない。また、同じ家庭環境で育った Mary と Bessy が著しく異なる性格である点では、Mrs. Lee の教育が正しかったかどうか疑問が残る。また、同一の家庭環境のなかで子どもたちがこのように、非常に異なった性格に育つということにも疑問が残る。

このように問題点はあるが、この短編小説は Mary によって作者が考えている母性、理想の母親像の prototype を知ることができるという点では興味深い作品である。

(3)

Hand and Heart (1863) にも、理想的な母親が登場する。ここでは、息子により教育をした母親が描かれている。

これは Gaskell 夫妻の友人であり Unitarian minister である Travers Madge が編集長をしている子ども向けの雑誌に書いた作品で、Uglo が ‘a moral tale of an orphaned child’s good influence on his uncle’s chaotic household’⁶⁾ と解説しているとおり、家庭教育はかくあるべしという Gaskell の道徳的かつ宗教的な信念を提示した訓話めいた内容である。作者の goody-goody な面が露骨に感じられるが、これは子ども向けに書かれたのだからやむを得ないことである。読み物としては退屈だが、作者の創作意図は読み取りやすい。

Tom は母との二人暮らしだが、彼女は物語が始まって間もなく死亡する。作品の title は、亡くなった母から Tom が受けた慈善的な行為についての訓えを表している。それは、お金を遣わない親切な行為にこそ価値があるという訓えである。*The Half-Brothers* で語り手の父が、愛情を感じることでできない義理の息子に、愛情の代わりとして金で買えるものは何でも与えるのと対照的である。金銭を費やす慈善行為は偽善に陥る危険があるが、金銭を手段にしなければその危険がないということだろうか。

主人公 Tom Fletcher の母は、‘a little shop’ を経営

して暮らしをたてている。ある夜、少年がお金がたくさんあればよいのになあと言うと、母は自分も欲しいけれど、お前とは違って、遣う目的があるときにだけお金が欲しいと思うのよと答える。そこで少年は、お金がなくてもできる ‘real good, wise things’⁶⁾ がたくさんあるねと応える。母とこんな会話を交わしている少年について、作者は ‘He knew she was pleased with him for having told her openly what was passing in his mind. (536)’ と書いている。意思が交わしあえる母子を作者が描こうとしていることが第一頁でわかる。

(4)

次に、少年がお金がなければできない善行をしたいと思うときにはお母さんはどうするのと尋ねると、母は余分に働いて収入を得るか節約するかのいずれかだと答える。もしお金が欲しければ、労働のために遊びや母子の炉端での語らいの時間を節約しなければならぬし、お金を節約しようと思えば自制が必要だと説明する。そして、いずれの場合にも要求される ‘self-denial, energy, and industry’ は望ましいものだと言いつつ、善行のためには収入も節約も ‘holy’ なことではあるが、お母さんの場合は、‘I must then think which will be most consistent with my other duties, before I decide whether I will earn or save money.’ (537) と諭す。母には生活費を得ることや子どもを教育すること、自分たちよりも貧しい人たちを援助することなど幾つもの ‘duties’ があるので、彼女は時間と欲望を賢明に割り振りしなければならない。母は Tom に、‘Now, do you think I should be doing my duty if I left you in the evenings, when you come home from school, to go out as a waiter at ladies’ parties?’ (537) と問いかける。夜働きに出ればお金を稼いで貧しい隣人たちへの援助に回ることができるけれど、子どもを独りきりにすることになるからよくない。だから善行の資金を得ることをあきらめて、夜はお前と一緒にいることを選ぶことになるのよ、と説明する。母は、家族生活を優先しながらささやかな慈善行為を心がけているのである。

彼女は Tom に、私たちにはお金を得ることは望めないのだから、明日はお金をかけないでどんな ‘little loving actions of help’ で人々を幸福にしてあげられるかを考えなさいと告げる。

彼は翌朝、起床してから登校するまでにお金のかからない親切を二箇所で行うが、父もきょうだいもない寂しい境遇なので、学校から帰宅してからいろいろ空想に耽ってしまう。母は、空想に耽っているよりも野原へ散歩に行つて野の花を摘んで帰ることを

勧める。彼は摘んできた花を、身体が不自由で花を摘みに出かけることができない lame Harry の家へ持って行くことを母に提案して賛同を得る。

Tom がその日に行った善行について話し終えたときに、母は彼に 'Let not thy left hand know what thy right hand doeth.' (546) という聖書中の言葉を聴かせる。これは、Harry が娘の稼ぎで暮らしているために昼間は独りっきりである点で Tom の境遇に似ていることと関連させて考えるべきかもしれない。相似た境遇にある隣人に善行を施した息子に、今日お前が行ったのと同じ恵みを神がいつかお前に与えてくださると信じ、当然のことをしたにすぎないという謙虚な気持ちでいるように教える。母は息子に、'I am glad you have seen the truth of what I said: how far more may be done by the loving heart than by mere money-giving; and every one may have the loving heart.' (546) と語る。母の教育はこれで完了したとみてよい。この日から一年後に、彼女は九歳の Tom を亡父の兄弟に託して世を去る。

(5)

亡母との暮らしと違って叔父の家族は粗雑な性格の人たちばかりである。3人の子どもたちを育てるために、叔母は大きな声で叱りつけたり笞で打ったりする。Tom は自分が育ってきたのとは対照的に教育面で欠陥のある Uncle John の家庭で、亡母から受けた教育の成果を発揮することになる。

叔父の家に住まわせてもらうようになった日に、家族のために Tom がお茶を沸かすのをみて、従兄の Jack は女々しい奴 ('a softy') だという印象をもつ。Jack のこの思いは、Tom が母のことを偲んで泣いているのをみていっそう強くなる。けれども、Tom が誤って窓ガラスを割ったときに、叔母に厳しく咎められることを覚悟の上で堂々と詫言を入れ、殴られても痛いのには泣かないで我慢しつづけ、その後も不満な様子を見せず叔母の使い走りをするのをみて、従兄弟たちは Tom に好奇心をもち、やがて尊敬するようになる。さらに Tom は、一歳半の Annie を可愛がって叔母に喜ばれる。こうやって Tom は、自分では気づいていないが叔父一家の人たちに和やかな家族生活の良さを教えていく。

信仰心のない叔父の家族との初めての夕食の際に、Tom は恥ずかしさを抑えて食前の祈りをする。語り手はこの場面の家族のことを、'They were not an ill-disposed set of people, but wanted thoughtfulness in their everyday life: that sort of thoughtfulness which gives

order to a home, and makes a wise and holy spirit of love that groundwork of order.' (555) と語っている。これは明らかに Gaskell の宗教観に基づく理想の家族像である。

このようにして、'softy' だと思っていた Tom が、実は男らしい ('manly') ことに伯父の家族は気づく。この男らしさは、具体的には 'the courage with which he dared to do what was right and quiet firmness with which he bore many kinds of pain' (555) である。

Tom が幼いころから、母親は息子を 'friend' あるいは 'companion' としてその人格を認め、'many household arts of comfort' (556) を教えていた。それを Tom は叔母に語る。伯父は、この甥によって家庭の平和と清潔さを教えられる。

作者は語り手に次のように語らせて作品を結んでいる。

Could money have made one-tenth part of this real and increasing happiness? I think you will all say no. And yet Tom was no powerful person; he was not clever; he was very friendless at first; but he was loving and good; and on those two qualities, which any of us may have if we try, the blessing of God lies in rich abundance. (557)

信仰心の深い母に育てられた息子を讃える作者の趣旨はよくわかるが、humour がなくて息が詰まるような作品である。

Enid L. Duthie は、親切な行為に関する Gaskell の思いについて、'It could be said that, for her, the quality of kindness is the seed of the Divine which she believed to exist, however hidden, in every human being.'⁷⁾ と述べている。Duthie のこのような見解を念頭において *Hand and Heart* を読んでみると、'loving and good' な Tom の親切な行為から、彼が単に神に祝福されるだけではなく、'the Divine' に近い存在に感じられてくる。

Tom が従兄の Jack に女々しいといって軽蔑されながら、母の訓えに従って実行する行為は自己犠牲的であり、これは *Bessy's Troubles at Home* の Mary との共通点である。こんな点から、Gaskell が女の「性」である忍耐強さや一途なやさしさを男にも期待していたことが推測できる。これは、男たちが母性を備えてくれることへの願いということになる。

(6)

The Half-Brothers にも、やはり一人息子を養っている未亡人が登場する。この作品では母が再婚し、息子 Gregory は義父のもとで辛い境遇に陥る。彼はなかば愚鈍者のように扱われるが、吹雪の夜に義弟の探索に

出かけ、自分の衣類を脱いで義弟にかけてやり、体温で義弟を温めながら死んでいく。このような物語の設定はやや型通りという印象を免れないが、注目すべきことは犠牲者が危険に身をさらすのが無知によるのではなく、宗教的な信念によるという点である。しかも Gregory は、再婚した母が弟を産んだために義父の跡取りの地位を失いながら、その地位を奪った義弟を救うために命を捨てる。義父は、溺愛していた実子を救ってくれた義理の息子が亡くなってから、彼に冷酷であったことを後悔する。奉仕の精神において、Gregory と *Hand and Heart* の Tom とには共通点が認められる。

The Half-Brothers と *Hand and Heart* には、主人公に実の父がいらないなど共通点が幾つかみられる。Tom は 'clever' でない少年であったと書かれているが、Gregory は過酷な環境のせいで一見したところ愚鈍な少年になってしまっている。これは、*Bessy's Troubles at Home* の Mary が自分は愚鈍だと思い込んでいるのと共通する注目点である。Gaskell の作品では、'loving and good' な人物が愚鈍にみられることが多い。

この Tom や Gregory や Mary と同系列の犠牲者を、Gaskell は *The Sexton's Hero* でも語っている。Gilbert Dawson は、Tom が初め従兄弟たちの目にそう映ったように、語り手 John に卑怯者のように思われる。Gilbert Dawson も卑怯者として世間の人たちに蔑視される。

信仰に裏打ちされた母性が愚鈍にみえるのは、見る側に小賢しさがあるからだろう。cleverness は egoism と重なり合うが、献身は自己をなげうつ行為であるから、利口な者の目には愚かに映るのである。蔑視されるのは、真の勇者の宿命だということになる。

(7)

Lizzie Leigh は、一途さのゆえに愚かにさえ見える母性を theme にした短編小説である。

James Leigh はこの上なく正直だが頑固で融通がきかない。Mrs. Leigh は彼と結婚して22年になるが、3年前までは常に夫の判断を受け入れて暮らしてきた。夫が厳しいなどという思いが起こると、それは自分が悪い女だからだと反省してきた。けれども物語が始まる3年前ごろからは、娘 Lizzie のことが原因で次のような心理状況になる。

—she had rebelled against her husband as against a tyrant, with a hidden, sullen rebellion, which tore up the old landmarks of wifely duty and affection, and poisoned the fountains whence gentlest love and reverence had once been

for ever springing.⁸⁾

これを読むと、Mrs. Leigh が夫よりも深い愛を娘に注いでいた理由がわかる。夫への愛がしばしば妻としての義務感を伴うものであるのに対し、娘への愛が母性本能によるものであるという一般論から考えれば、これは当然のことである。そして、娘を許せない家父長的な夫と娘を許そうとする妻に、旧約聖書と新約聖書のような contrast を私たちは感じ取る。

娘の Lizzie は16歳で Manchester へ女中奉公に出て、男に誘惑されて身ごもったために雇い主から追い出される。彼女は父を恐れて家には戻らなかった。父は、道を誤った Lizzie はもはや家族ではないと宣言する。Mrs. Leigh は、夫の苛酷なまでの厳しさに反抗し、彼への愛を失う。けれども、死の床で彼が娘を許してやろうと言うと、'those last blessed words replaced him on his throne in her heart, and called out penitent anguish for all the bitter estrangement of later years(1 - 2)' という具合に、彼をふたたび家長の座に戻してやり、自分が亡夫に対してやさしくなかったことが亡夫の頑固さの原因であったかのように思ってから後悔する。夫人のこの反省は、今日の Feminism から言えば自己否定的なものではあるが、3年間にわたって夫に従順であるべしという規範を無視し反抗を示すのは、当時の女性としてはかなり勇気のいることであった。作者は 'the most perfect uprightness' の見本のような夫と 'the most complete confidence and loving submission' の典型である妻による、表向きだけは 'calm and happy' な結婚生活への批判を行っているのである。

(8)

娘が男に誘惑されて身を誤るという設定は、当時の小説で女性の unhappiness を語る典型的な手段であった。誘惑に陥った娘の軽率さは咎められるべきだろうが、罪はむしろ誘惑した青年にある筈である。けれども当時は、誘惑された娘は家族や社会から葬り去られるのが当然だとする固定観念が支配していた。Gaskell の物語においては、この固定観念にまさる思いやりをもっている奇特な人物が墮ちた娘を救うというのが一つの公式に近い。この公式通りに、まずは母親の Mrs. Leigh が娘の身を案じ、夫に抗って娘の罪を許し、夫が亡くなって自由を得ると London に出て娘を探し始める。

Christmas の日の John Leigh の死で始まり、Nanny の亡骸を墓地に運ぶ痛ましい情景で終わるこの作品は、陰鬱な短編小説である。主人公が苦難をくぐって後に道徳的に正しい生活に入るという Victorian Age

に受ける筋書きであり、Dickens がこの作品を評価したことも頷ける。Gaskell が時代の風潮に同調する傾向を、A. B. Hopkins は ‘In handling the ancient Greek theme that man by suffering shall learn she does not always rise to the height of genuine tragedy⁹⁾と批評している。しかし、この説教臭さは今日の読者には多少気になるものの、この短編小説は悲劇ではないから、heroine が苦難のあとにささやかながら幸せな生活に入ることには文句のつけようはない。終始陰鬱なこの作品が読者に感動を与えるのは、Mrs. Leigh、Lizzie および Susan の三人の母性愛であろう。Susan も Mrs. Leigh と同じように、Lizzie の過ちを許している。この3人によって、作者は三様の motherness を描いている。

Susan は、Lizzie の罪を初めから意に介していない。この作品の theme は、Susan が Will を諭す ‘He [God] is the judge; we are not. —Will Leigh! I have thought so well of you; don’t go and make me think you cruel and hard. Goodness is not goodness unless there is mercy and tenderness with it(29)(括弧内は著者による)という言葉に要約されていると考えてよい。

(9)

Hopkins は18世紀に Samuel Richardson が、‘fallen women’ が受ける罰について「死の報い」という公式を *Clarissa* でつくりあげたと述べている¹⁰⁾。それは、放蕩者の罠にかかって墮ちた virtuous な女性には救いがなく、死よりほかに道はないというものである。この公式に従うことによって、後の小説家や詩人は彼らの主題であるべき善の女主人公たちの多様な生活を形式の決まった romance の霧のなかにぼかしてしまったというのである。そして Hopkins は、Gaskell はこの公式を Ruth において大胆に拒否したが、*Lizzie Leigh* においても控えめながら拒否していると批評している。Hopkins は、Ruth は看護婦として社会で認められてから死に、Lizzie は母と再会して幸せな生活に入るという点で *Clarissa* とは対照的だということである。この批評は墮ちた女性にとって子どもが不名誉の証拠ではなく、結局は母性に目覚めて困難を克服し社会で尊敬を受けるきっかけになるという、いわば Gaskell の公式を私たちに気づかせて興味深い。この点で、Gaskell は Richardson よりも新しい作家だとみることができる。Gaskell が、Lizzie が不義の子を棄ててしまわないで信頼できそうな女性 Susan を選んでわが子を託すという窮余の策をとるような筋にしたのは Dickens の提案によるものではあったが、娘の養育費を Susan の家の前に届けつけるといった点などで、

Lizzie も母として責任を果たしている。また自分の衣服を仕立て直して Nanny の服をつくるなど、Lizzie の母性愛は折りをみて語られている。そして彼女は、家族のもとに帰ったあと、不幸な家庭があれば訪問してくれるやさしい女性として人々に称賛されるようになる。今日ふうに言えば、未婚の母が愛児は失うが苦難の末に世間に復帰を果たしたということになる。

Gaskell がこのように Richardson 的な romance の公式を脱出して独自の姿勢を打ち出せたのは、彼女が自分が住んでいる Manchester で少女たちへの救済活動を手伝っていたからであろう。Dickens や Angela Burdett-Couts 男爵夫人とともに、Gaskell は不運な少女たちを Australia に移民させ新しい生活を始めさせる手助けをしていた。未婚の母の物語である *Lizzie Leigh* が1850年3月30日刊行の *Household Words* 創刊号の序文のあとに掲載されていることから、Dickens が Gaskell をこの新しい雑誌への寄稿者に迎えたのも、救済活動への協力を求めてのことだったと推測できる。

Hopkins は、Gaskell が創作と実践の両面で行った救済活動について、

The devoted but discriminating sympathy exercised by Mrs. Gaskell in both her fiction and her case work in the slums of Manchester was something out of the ordinary where society reviled and law offered no remedy but prison.¹¹⁾

と説明しているが、Mrs. Leigh の扱いには活動家の視点に立つ夫婦のあり方への批判が窺える。Mrs. Leigh は、たとえ夫の人格が尊敬に値しなくても従順に仕えるべきだという妻としての義務に縛られ、十七年間も夫の頑固さに耐えて ‘the landmarks of wifely duty’ (1) を貫き、夫と死別する直前のほんのしばらくは反抗を示すが、母性愛のゆえに崩れてしまう。ここには、結婚についての社会通念への批判が窺える。また Susan が生活費に加えて、父の飲み代まで稼いで主婦の義務を果たしながら、父親に従順である点についても疑問を投げかけている。

これらの点は Gaskell の進歩的な面として評価できるが、彼女にも当時の社会通念から抜けきれていない面がある。たとえば、Lizzie が罪を償うための試練として Nanny の死という苦難を課しているが、現代の読者には、無邪気な幼児がどうして犠牲にならなければならないのかという疑問が起る。Lizzie の誘惑者である男が登場せず、責任を免れていることも気になる。

また Will は酔っぱらった彼女の父を送り届けたとき、Palmer 家の住まいが掃除が行き届いて清潔なの

をみて感心する。作者が娘の健気さを肯定してしまうので、読者には老父の父権による甘えを Susan とともに作者も肯定しているようにも読める。

(10)

作品の初めの方で、作者は Mrs. Leigh の反省として、
'if she had only been more gentle and less angrily reserved, he might have relented earlier—and in time!' (2) と書いている。けれども、妻がやさしく控えめに接していたら、横柄な夫は彼女の意見を無視して娘を奉公に出す可能性がいっそう強くなったに違いないと判断するのが妥当なように思える。だから、'in time!' には疑問が残りつづける。

E. Holy Pike は Mrs. Leigh の上記の反省を Nanny が転落死するくだりと関連させて、次のような批評をしている。

...it is appropriate that Susan's dutiful concern for her drunken father is instrumental in restoring Lizzie to her family, for it takes her from Nanny and her bed in the night, leading to Nanny falling from the loft while looking for her.¹²⁾

Pike はこのように、父親に対する Susan の孝行心は、Lizzie が家族のもとへ帰るきっかけをつくるための手段として作者が使ったという見解を述べている。これは卓見ではあるけれども、作者が Nanny を転落死させるのは倫落した Lizzie を制裁する意図によるものだ、と厳しく理解するのが妥当なように私には思える。19世紀の Christian である作者の未婚の母への寛容性には限度があったし、婚姻によらないで生まれた子には苛酷な生涯が待っていることは間違いない。

Will は、Lizzie への厳しさという点では、作品の終わり近くまで父に近い態度を示している。彼は当時の社会通念に従って理性的に判断し、Susan に会うまでは姉を許すことができない。けれども彼は、父と違ってやさしい青年である。作者は作品の初めの方で、このことを、母の希望で弟の Tom が聖書の放蕩息子の章を朗読するのを聴きながら Will が重苦しい気分になるという描写によって暗示している。

Will sate with his head depressed, and hung down. He knew why that chapter had been chosen; and to him it recalled the family's disgrace. When the reading was ended, he still hung down his head in gloomy silence. (3)

Will のこの 'gloomy silence' には、妹を咎める気持ちのなかに、微かではあるが許してやれない自分に苛立つ気持ちが窺える。姉のような行為を家族の恥だとする道徳観を教え込まれてきたために、観念的には父の容赦のない怒りに同調しながら、感情的には父

の態度を厳しすぎると思っている。これは家族への愛であり、彼は家族愛と世間体とに挟まれて苦しんでいるのである。彼は自分が抑え込んでいたこの家族愛を Susan への恋によってはっきり自覚できるようになる。この点で Will と Susan の結婚は、彼の両親のそれとは違って、家父長制に縛られない自由な生活を予想させる。

(11)

Gaskell の作品には、男よりも女の方により Christian が多いようである。たとえば Mrs. Leigh が倫落した娘を咎めず、息子の恋愛に深い理解を示すやさしさの根底には深い信仰が感じ取れる。神が慈悲深いことを彼女は知っているからこそ、忍耐強く娘を探しつづけることができるのである。Susan にも、Christianらしいやさしさが備わっている。Mrs. Leigh は Susan に、自分だって生きていくためには娘と同じことをしなければならなかったでしょう、と述懐する。父親は世間体を気にして憤るだけで、娘を思いやることはできない。Susan の父は、Lizzie が Nanny を連れて帰った夜、育てることに猛反対するが、おれが気楽に暮らせるだけおまえが稼いでくれるのなら育ててもよいと言う。父性という点で、この父親は失格者である。Will は Susan が自分にとって理想的な結婚相手だと考えるが、妹のことが知れた途端に自分たち家族が彼女に軽蔑されると思い込んで絶望的になってしまう。この息子に Mrs. Leigh は、Lizzie のことを打ち明けてみて、Susan が罪ある娘に情けをかけてくれるならおまえの妻になるのにふさわしい女性だ、という見解を述べる。この母子の対話に、家族愛の男女差がはっきり認められる。家族愛の心情の深さにおいて、男性は女性に太刀打ちできていない。

Mrs. Leigh は悔い改めた者を天使と同じように受け入れる寛容が大切だという信仰心に基づいて、Susan が信仰者であるかどうかで妻としての資格を判断するよう息子に求める。Susan を妻として迎える条件として、墮ちた妹をわが家に迎え入れることを Will に要請する母の態度を、作者は 'She stood, no longer, as the meek, imploring, gentle mother, but firm and dignified, as if the interpreter of God's will' (22) と書いている。これに比べると、Nanny が床に転落して死んだのを知って、煩わしい者がいなくなってよかったと叫ぶ Susan の父は、Christian として完全な失格者である。

Gaskell は家族生活では相互に許しあうのが大切であること、聖書がそれを訓えていることを読者に伝えようとしているのである。Will と Susan の結婚の前提

として、花嫁と花婿の母との間に深い相互理解があることにも注目しなければならない。Mrs. Leigh が Will の母であることを知る前に、Lizzie のことを Susan は Mrs. Leigh に 'I've often thought the poor mother feels near to God when she brings this money.' (18) と話す。すると Mrs. Leigh は、'Eh! but I were nearer right about thee than Will.' (18) と答えている。このあたりには、家族を構え生活を維持できる能力をもっているのは女性だということを、作者は生活での実感を通して語っているのだろうか。

Mrs. Leigh と Susan に共通した性質であるやさしさや忍耐力などは男にはない女の性であり、これに信仰心が加わって、彼女たちをよき母たらしめているというのが、少なくともこの短編小説における Gaskell の見解のように私には思える。

「女の性」というとらえ方は feminism 以前の感覚であるが、Gaskell は生物学的に女が家族生活の管理者として男にまさることを信じていたのではないかと私は推測する。

(12)

作者は、Nanny が階段から転落したので慌てて医者のもとへ駆けつけるくだりでは、Susan についてまわる Lizzie には 'a shadow' とか 'the other' とか 'that guilty wretched creature' とかいう語を用い、彼女が幼子を死なせたのは自分であると反省し悔悟するまでは、'mother' という呼び方はしていない。作者は 'mother' という語を、宗教的な倫理観に照らして遣い分けている。そして作品の終わり間近でやっと、作者は Lizzie を 'mother' として認めているのである。

Nanny は罪の象徴であるから、Lizzie が更生する前提としてこの世から消えてもらうことが不可避であった。これは当時の社会通念でもあり、Gaskell の見解でもあった。これは、Pike によれば illegitimate child が承認されると、traditional family unit が社会の継続のための唯一の手段ではないことになるという考えに基づくものであった¹³⁾。このようなわけで Gaskell は、Lizzie が父なし子の Nanny を連れて生家へ帰るといった結末にすることができなかった。また、Gaskell は Susan が Nanny を自分の姪という口実で育てることも承認していない。ここでは、母性愛を無視してしまっている。

Will と Susan は結婚して子どもたちに恵まれ幸せな家族生活を送るが、彼女の父のその後の消息は語られていない。また、Nanny は先祖の墓地ではなく、荒野の墓地に葬られる。Lizzie は生家への帰還はなら

ず、母と一緒に谷間の小屋でひっそりと暮らすことになる。作者は、罰すべき人たちには罰を与えているのである。このことを Pollard は、'...while reintegration is necessary to the reform of the sinner, that integration must not involve the risk of contaminating the virtuous members of the family.'¹⁴⁾と説明している。家族の神聖さを作者が重要視していたことがわかる。

あたたかい家族関係をつくる上で女性の性は尊重されなければならないから、頑なに家父長制にこだわることは望ましくない、というのが Lizzie Leigh における Gaskell の家族観である。

(13)

The Moorland Cottage の Mrs. Browne も未亡人となって子どもを育てるが、これまでに考察してきた母親たちと違って、母として失格者である。

Browne 家には息子の Edward と娘の Maggie がいるが、Edward は、男性であるという理由で家族のなかで横暴にふるまう。亡父がどのような方針で彼を育てたかということはほとんど書かれていないけれども、息子に対する未亡人の態度からおおよそのことは推測できる。亡父は息子を自分と同じ牧師にすることだけを強く望み、娘を慈しまなかったのである。Mrs. Browne は夫の死後も彼の教育方針を引き継いで息子の学習を何よりも優先し、甘やかした。そのぶん、Maggie には厳しくあたる。

亡父は勉強さえさせれば息子を紳士に育てられると思ひ込むあまり、家族の一員としての役割から息子を遠ざけた。そのために彼は、わがままな青年になってしまった。Edward はこのような境遇で、一見大切にされているようにみえるが、実際には愛情のない扱いを受けているにすぎない。彼は学校で成績がよく、「倫理」以外はみな高得点をとるが、これによって作者は、真実の愛情を家族との間で交わしあうことなしに倫理を会得することは不可能だということを暗示しているのである。

Edward は Maggie を軽蔑しているが、そのくせ日常の細々としたことでも彼女の手を借りなければ生活ができない。健気な彼女の性格は、*Bessy's Troubles at Home* の Mary と重なりあう。いざというときに力量を発揮するのは女性であるという Gaskell のやや紋切り型の筋書きのなかで、Maggie の健気な性格を描出することによって、作者は男尊女卑の社会通念を皮肉っているようにさえ感じられる。ただ、彼女の性格が女性を軽視する父や兄がいる家庭環境のなかで鍛えられたものではなく、Mrs. Buxton の感化で形成され

ることに注目しなければならない。この病身の夫人がいなかったら、Maggie は望ましい成長を遂げることはできなかった。作者は Maggie に対する Mrs. Buxton の影響を語ることによって、理想的な母と娘の関係を提示しているのである。

これと対照的に Gaskell は、Browne 家の家庭教育を当時の社会で広くみられた、誤った教育の見本として描いている。母は息子の進路について本人と話し合うが、意見が分かれる。母は彼が夫と同じ牧師になることを願う。けれども彼女は、当人の性格が聖職にふさわしいかどうかは考えていない。彼女は教育方針を誤って息子を聖職には値しない人格にしてしまいがら、ただ夫と同じ職業に就かせることに固執しているのである。彼女は息子を甘やかしてはいるが、それは彼を聖職につけたいという自分本位の目的のためであって、真の愛情ではない。Mrs. Leigh と違って、彼女は夫の死後もその支配下にいるのである。

Edward は弁護士になりたいと言う。理由は、牧師よりも弁護士の方が収入がはるかに多いからである。母親はこれに反論して、牧師だった夫が身分の高い家から食事に招かれていたとか、1年に千ポンド稼いでいたとか言って説得を試みる。彼女は聖職を、社会的な身分や収入でしか評価していないのである。母と息子は議論するが、収入や社会的地位を重視するという点でだけは意見が一致している。そして Edward には 'smart and clever, slow and dull' という価値判断がなく、そこには 'right and wrong'⁴⁵⁾ が欠落している。

Browne 夫人と Edward は常に体面を気にしている。'esquire' とか 'gentleman' と呼ばれる人たちに対する強い憧れがあり、自分はそういった人たちとは違って価値の低い人間だという思いがある。そしてこの劣等感に起因する心理的な歪みのゆえに、人の好意を素直に受け取ることができない。人を信じることができないために、人の親切は心からのものではないと考える。だから、人に対して好意を示す気も起きない。そんな心理状態にあるため、Buxton 夫妻と接していても、相手の誠実さを感じ取れなかったり、つまらぬ誤解をする。自分を蔑んでいるのは他人ではなく自分自身であることに気づいていない。

Edward は Maggie に、俺を助けるために Frank との結婚をあきらめると迫る。彼は妹の手を乱暴につかんで、血を分けた兄と妹なのにお前は自分だけ幸せになるために俺を牢獄へやるつもりか、と迫る。母親も Edward に加勢して Maggie を説得する。母と息子で家族愛を Maggie に強要するのである。

Gaskell は、人間は本来善良な存在であるから、わ

がままな人にもいつか反省するときがめぐってくるという信念を持っていた。しかし Edward だけは、この域を逸脱した人物として描いている。作者は Maggie によって Mr. Buxton に本来の純粋な心を取り戻させ、Mrs. Browne には Maggie への愛情が欠けていたことに関して反省の機会を与えたが、Edward には改心の機会を与えなかった。Edward を溺死させるところに、Maggie の自己犠牲の対局にある利己主義を徹底的に否定する作者の姿勢が認められる。

(14)

Mrs. Browne が世間体を気にする人物であることを、作者は彼女が毎週日曜日になると亡くなった夫の墓へ行って泣いている自分の姿を世間に見せつけるという行動を描くことによって読者に印象づける。作者はこれを彼女の 'duty' および 'custom' と呼ぶ。作者が肯定的に描いている Buxton 家から招待を受けたときにも、応じたい気持ちがあるにもかかわらず行く気にはなれないと答える。世間の目を気にして、夫の死による悲しみから立ち直っていないふりをしてみせているのである。Buxton 氏に、新しい知り合いをつくれれば気分が変わる、家に引きこもってばかりというのは子どもたちのためにもよくないと説得されて、いい口実を与えてもらったことを密かに感謝し、ため息をついて「子どもたちのために」招待に応じることにする。

こういった描写は *Cranford* 中の、質素な生活を送りながらも表面は貴族の華やかさを演じていた女性たちの描写を思い出させるが、*Cranford* の女性たちと Browne 夫人とで決定的に違うのは、前者に対しては作者の目が好意的であり、後者に対しては冷たく批判的だということである。*Cranford* 中の女性たちは、儉約を美德としながら贅沢な雰囲気を楽しもうとする努力に哀愁があり、humorous である。体裁だけにとらわれているのではないから、Miss Matty が窮地に追い込まれたときには、日頃の仮面をかなぐりすてて救済の対策を練る。彼女たちの気取りは、隣人愛に優先することはない。これと違って Browne 夫人は優雅さや裕福さや社会的地位を人間の本質的な価値だと決め込んでいる。装いが鉄則になっている。Buxton 家からの招待に応じる際に娘に食事の席では2回以上は決して料理をおかわりしてはならないと忠告するのは、この鉄則の見本である。彼女がこんなふうになるのは、自分を低く評価しているからだ。虚偽に支配された生活をしているから、彼女の行為や言葉はいつも内心とは裏腹である。

この母親は物語の結末近くで Maggie が Edward につきそってアメリカに行くと言い出したときには娘に感謝し、辛くあたってきたことを許してほしい、Edward と一緒に行ってくれることに感謝していると言う。謝罪しながら、じつは Edward のために Maggie を犠牲にしようとしているのである。娘を幼いころから虐げてきたことをいささかでも反省したのかどうかは疑わしい。けれども、Maggie のやさしさに心を動かされたのだと理解できれば、作者が Maggie の愛の勝利を Mrs. Browne の改心によって暗示しておきたかったのだというふうには解釈できよう。

(むすび)

最近、女性は自分が産んだ子どもを可愛く思うものだという「母性神話」が否定されているが、林道義教授はこれを否定し、母性本能の普遍的な存在を肯定している。

林教授は母性本能の特色として、「目標を決めると、なりふり構わず突き進むこと」と、「子どもの人格が自分の人格とは別のものだということを忘れさせる」こと、さらに「乳幼児期に何でも世話をしなければならなかったときの感じのままで、いつまでも同様の世話が必要だと思い込んでいる心理状態」などを指摘している¹⁶⁾。そして、母親が子どもにみせるこのような没頭を、D. W. ウニコットが 'maternal preoccupation' と名づけていると説明している¹⁷⁾。これは、昨今は否定されがちな母性本能についての大膽な肯定論であるが、Gaskell の母親観にほぼ一致する。

「なりふり構わず突き進むこと」は、作者によって肯定的に描かれている Mrs. Leigh だけではなく、その一途さという点では「目標」を誤っているとして否定的に描かれている Mrs. Browne にも当てはまる。Gaskell の中・短編小説に登場するどの母親も、子どもの人格と自分を一体と思ひ込み、「いつまでも同様の世話が必要だと思い込んでいる心理状態」を抜けきれないでいる。そして Gaskell は、これらの母性本能を称賛している。

Bessy の母 Mrs. Lee や Tom の母である Mrs. Fletcher や Lizzie の母である Mrs. Leigh、それから Frank の母 Mrs. Buxton などは、いずれも Gaskell が望ましいと考える母親像である。Lizzie の母は倫落した娘のために辛苦をなめるが、そのゆえに読者に母性をいちばん強く印象づけている。夫の横暴さが彼女の苦勞の発端であったという点から、母という身分の苛酷さが男によって左右されることも読者に伝わってくる。

一方、Maggie の母である Mrs. Browne が息子だけを溺愛するのは、世間的な体面を重んじすぎる結果だと作者は説明したいのだろう。母性愛が本能的な要素を持つものだとすれば娘への冷淡さは異常に思えるが、上述のように目標を誤っているのだという説明なら頷ける。また彼女が娘のやさしさに気づけないのは、*Libbie Marsh's Three Eras* の Anne と同じ原因によるという説明も可能である。Anne は Frank を介護してきた Margaret Hall の母性愛が理解できないために、障害者の息子が亡くなって介護から解放され喜んでいるだろうと推測する。それと同じように、Mrs. Browne は Mr. Buxton が病気の妻を深く敬愛していることがわからないために、病弱な夫人との暮らしで彼は気分が滅入っていると解釈している。いずれも、洞察力あるいは聡明さが欠落しているのである。

Mary はまだ子どもであり、Maggie や Susan は未婚ではあるが、すでに motherhood がそなわっている。彼女たちのように未婚ではあるが母性が豊かな女性を、Gaskell は他の作品で繰り返して描いている。母性は必ずしも産むことではなく、幼児と接し育児を体験することによって顕現するものであるという視点で考えると、本論で取り上げた女性たちのうちで、捨て子を育てる Susan は興味深い人物である。

けれども Gaskell の理想の母親像は、究極的には Maggie を教育した Mrs. Buxton である。彼女は Maggie に、神の僕となり、神の意思を実行することに努めた信仰の篤い女性たちの話を聴かせる。'[Maggie] was formed as she was by Mrs. Buxton's care and love.' (78) (括弧内は著者による)と作者は書いている。夫人は、Maggie が聖女たちの影響で Heroic action の機会を求めようになってしまうともいけないと懸念して、poor maid-servant や weary governess など気高い目的のために自分を犠牲にしてきた無名の女たちのことを話している。また、たとえば夫人の教育の結果として語られている '...she [Maggie] was as convinced as Erminia, that money could not really help any one to happiness.' (49) (括弧内は著者による) という文や Frank の 'Good God! that money should have such power to corrupt men.' (60) という言葉などを総合して考えると、夫人が一つの方針で Frank や Erminia や Maggie を教育したことは明白である。若い3人が、Mrs. Browne や Mr. Buxton の現世的な欲望を超越した生き方に到達できたのは夫人による教育の恩恵である。Frank は、哀しみは人間が聖なる目的を求め崇高な善を実現するために神によって遣わされるものだと考えているが、これは病気に耐えて気高く生涯を終えた母

から学びとったものである。

Mr. Buxton は Maggie が Edward を救ってくれるように懇願するのを聴いていて、慈悲深かった亡妻のことを思い出す。

...as Maggie spoke, his dead wife's voice was heard, imploring mercy in a clear distinct tone, though faint, as if separated from him by an infinite distance of space. —Words of hers, long ago spoken, and merciful forgiving expressions, made use of in former days to soften him in some angry mood, were clearly remembered while Maggie spoke: and their influence was perceptible in the change of his tone, and the wavering of his manner henceforward. (78 - 9)

このようにみえてくると、Maggie はほぼ完全に Mrs. Buxton の像に重なっている。Maggie はわがままな Edward が罪を犯しても彼が善人であると考え、彼を愛情で正しい道に帰すことができると信じつづけていた。Mrs. Buxton は Maggie の母だったのである。

(注)

- 1) Lansbury, Coral, *Elizabeth Gaskell*, Twayne Publishers: Boston, 75, 1984.
- 2) Colby, Robin B., *Some Appointed Work to Do, Women and Vocation in the Fiction of Elizabeth Gaskell*, Greenwood Press, London, 67, 1995.
- 3) これら諸家の批評は、Robin B. Colby, *Some Appointed Work to Do*, 72) から引用した。
- 4) Gaskell, Elizabeth, *The Works of Mrs. Gaskell, Vol.5*, AMS Press, New York, 535, 1963. テキストからの引用はこの版を用い、以後、頁数を括弧内に記す。
- 5) Uglow, Jenny, *Elizabeth Gaskell, A Habit of Stories*, Farrar Straus Giroux, New York, 234, 1993.
- 6) Gaskell, Elizabeth, *The Works of Mrs. Gaskell, Vol.7*, 536, 1963. テキストからの引用はこの版を用い、以後、頁数を括弧内に記す。
- 7) Duthie, Enid L., *The Themes of Elizabeth Gaskell*, London, The Macmillan Press LTD, London, 158, 1980.
- 8) Gaskell, Elizabeth, *Cousin Phillis and Other Tales*, World Classics, New York, Oxford University Press, 1, 1981. テキストからの引用はこの版を用い、以後、頁数を括弧内に記す。
- 9) Hopkins, A. B. *Elizabeth Gaskell, Her Life and Work*, New York, Octagon Books, 89, 1971.
- 10) Ibid., 130.
- 11) Ibid., 131.
- 12) Pike, Elizabeth Holly, *Family and Society in the Works of Elizabeth Gaskell*, New York, Peter Lang Publishing, 52, 1991.
- 13) op. Cit.
- 14) Pollard, Arthur, *Mrs. Gaskell, Novelist and Biographer*, Manchester University Press, 53, 1965.
- 15) Gaskell, Elizabeth, *The Moorland Cottage and Other Stories*, New York: Oxford University Press, 40, 1995. テキストからの引用はこの版を用い、以後、頁数を括弧内に記す。
- 16) 林道義著：母性の復権、中央公論社、126 7、1999年。
- 17) Ibid., 145.